

【原 著】

中学校の「職場体験」を生かした複数教科横断的な
キャリア教育の開発
－教科学習と学校生活,社会生活のレリバンス構築を目指して－

青木 多寿子 杉田 進太郎 山崎 麻友

Development of Cross-Curricular Career Education Making Use of Internship in a Middle School :
Building Relevance of Students 'Subjective Learning, School life, and Social Life

AOKI Tazuko, SUGITA Shintaro, YAMASAKI Mayu

2021

岡山大学教師教育開発センター紀要 第11号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.11, March 2021

中学校の「職場体験」を生かした複数教科横断的な キャリア教育の開発

— 教科学習と学校生活, 社会生活のレリバンス構築を目指して —

青木 多寿子※1 杉田 進太郎※2 山崎 麻友※2

キャリア教育として中学校の職場体験活動はほぼすべての学校で実施されている。本稿はその事前指導, 事後指導を通して, 職場体験と学校で学ぶ教科, 学校生活, 社会生活を生徒にとって意味あるつながりの構築を目指して行った実践の紹介である。具体的には, 教職免許を持つ6名の大学院生が, それぞれの専門性を生かして教科の専門性と働くことと生活がつながっていることを, 中学校2年生の職場体験の事後指導Iとしてポスターセッションで伝えた。事後指導2時間目では, 生徒は働くことと生活と教科のつながりを可視化するマップを作成して意見交換をした。これらの活動の成果は, 生徒が記入した授業の振り返りを分類することで確認した。その結果, 授業実践者がねらったつながりに気づいたと思われる記述が多く見られた。中でも多かったのは, 将来に備えて今後の勉学や努力したいという趣旨の回答であった。

キーワード: キャリア教育, 職場体験活動, 複数教科横断的な指導

※1 岡山大学大学院教育学研究科

※2 岡山大学大学院教育学研究科大学院生

I 研究の背景と目的

民間調査機関が大学との共同で調査した試算によると, AIの発達でこれから10年~20年後では, 現在ある日本の仕事の49%の人の仕事がAIで代替可能になる可能性があるという¹⁾。テクノロジーが日々発達しグローバル化が急速の勢いで進む現在では, 未来を担う子どもたちが従来のように今ある仕事をそのまま引き継ぐという前提では立ち行かなくなる可能性が高い。つまり, 子どもたちは今以上にこの社会変革を知った上で学び, 自分の能力や適性を知り, 社会のニーズを知り, 社会の変化に自分を適応させてゆくような柔軟性が必要になってくるのではないだろうか。今後の学校教育ではキャリア教育が一層重視されると予測できる。

日本でキャリア教育が注目されるようになったのは, 1999年に中央教育審議会答申で生徒が学校から社会へスムーズに移行できるように, 小学校段階からのキャリア教育実践の必要性が指摘されたことによる(「初等中等教育と高等教育の接続改善について」²⁾)。その後, 2011年の中央教育審議会の中では,

キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基礎となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている（「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」³⁾）。

また、キャリア教育で育成する主要な能力として「基礎的・汎用的能力」が提案されている。これは、「人間関係形成・社会的能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4つの能力で⁴⁾、それ以前にあった「4領域8能力」が小学校から高校までの想定にとどまりがちであったことに比して次の点が異なっている。それは、①人が生涯を通して育成すべき様々な課題に対応できる点、②高等学校卒業後の社会人として求められる能力と共通言語になっている点、である。

このような経緯を経て導入されたキャリア教育の代表的なものとして中学校の職場体験活動があげられる。国立教育政策研究所（2017）によると、公立中学校における職場体験の実施状況は、98.6%であり（平成29年度における職場体験・インターンシップ実施状況等について）⁵⁾、職場体験活動は全国の殆どの中学校で実施されていることがわかった。そして、職場体験活動で重視されている点については、7割を超える学校が「職業や就労にかかわる体験活動（職場体験活動等）を充実させること」、「職場体験活動や体験入学等の体験活動において事前指導・事後指導を重視すること」と回答しており⁶⁾、この職場体験活動では体験活動（職場体験活動等）が重視されている現状がうかがえる。

他方で、この活動の限界も指摘されるようになった。例えば、中央教育審議会（2011）では、キャリア教育の意義・効果として、「第三に、キャリア教育を実践し、学校生活と社会生活や職業生活を結び、関連付け、将来の夢と学業を結び付けることにより、生徒・学生等の学習意欲を喚起することの大切さが確認できる」⁷⁾と記している（「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（2011）」）。つまり、学校生活と社会生活、および職業生活を結びつける、関連付ける、将来の学業を結びつけることの重要性が指摘されている。他方で、国立政策研究所（2020）の調査では、「当該体験活動の経験をこれからの教科学習や学校生活につなげる指導」が行われているのは約6割にすぎない⁸⁾。つまり、職場体験活動等を教科学習や学校生活につなげる指導がキャリア教育における課題であることを示している。

II 教科横断的な指導の関わり

生徒が教科学習と学校生活、社会生活のつながりを理解していくとともに興味、関心を高め、学びを意味づけるには、生徒たちが各教科で身につける能力が学校生活、社会生活の出来事や諸課題で実際に活用できることに気づく必要があるだろう。他方で、現実の学校生活、社会生活の出来事や諸課題は、単一教科で解決できるものではない。このことから、学校生活での学びや能力が社会生活や将来の自分にどのようにつながっているかに気づくには、教科横断的な指導を行う必要があると考えた。この点については、総合的な学習の記述の中に、類似の発想がみられる（「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説」）。

この中で、「総合的な学習の時間編（2018）」の(2)改訂に、次のような基本的な考え方が示されている⁹⁾。

『総合的な学習の時間においては、探究的な学習の過程を一層重視し、各教科等で育成する資質、能力を相互に関連付け、実社会、実生活において活用できるものとするとともに、各教科等を越えた学習の基盤となる資質、能力を育成する』

この記述を見ても、教科横断的に相互に関連付けることで、実社会、実生活に活用できる力の獲得が期待できることがうかがえる。これに関して、田中（2019）は資質、能力（言語能力、情報活用能力、問題発見、解決能力等）の育成のためには、「生徒の学びの融合と結合を図る」ことを目的とした教科横断的な視点の重要性や意味を主張している¹⁰⁾。

これらの見解をもとに、授業実践開発の要点として複数教科を取り扱い、各教科で身につけられる能力を明示するとともに、それらが学校生活、社会生活のどの場面でどのように活用できるのかを理解していく教科横断的な指導を取り入れることとした。これらの指導は、学校生活、社会生活、職業生活を結び付けるだけでなく、将来の夢と学業を結び付けることも必要であろう。

Ⅲ アメリカのキャリア教育

日本より早くキャリア教育に取り組んだアメリカは、この点において参考になる教育を行っている。青木(2012)の研究では、キャリア教育について1997年に全米で賞を受賞したカンザス州ブルーバレーでは、中学校の必須科目「ウェルネスとキャリア」がキャリアを幸福とつなぐ授業になっていることを紹介している¹¹⁾。この授業は、多くの教科の先生がオムニバスで行う授業で、各教科の先生が自分の教科の視点で職業を紹介する。つまり、教科教育とキャリア教育が結びついている。この中で青木（2012）は、社会科の授業について具体的に取り上げている。概説すると次のようになる。

まず、街に必要な仕事が表示され、班ごとにそれらの仕事が割り当てられる。そして各班は、その仕事に就いたと想定して活動する。その際の資料には、その仕事に就いた場合の1日の具体的な生活を知る資料、収入に関する資料、必要な学歴やスキルに関する資料もある。それらを通して仕事を理解したうえで、生徒たちは仕事の収入だけでなく、仕事をする上で必要な経費、生活費、仕事以外に使う余暇の時間を計算する。さらに1日の24時間、1週間で168時間を、仕事と家事、生活のための時間にどのように割り当てるかを考えてプランを立てる。最後にそれぞれの仕事についてクラスで学びを共有する活動を通して、仕事と社会、自分の生活、将来のプランをつないでいく活動である。

加えて青木(2012)は、このような取り組みを可能にしている教科としての社会科の目標を分析している。そして、社会科の科目の柱に、歴史や地理のほか、「キャリア教育」の柱が明確に位置づけられていることを示している¹²⁾。

具体的な内容としては、6年生で「社会に必要な仕事がいかに多いかを知る」「現代社会と過去の社会で生きてゆくためのスキルを比較し、対比する」、7年生では「今の社会に必要な生きるスキルを調査し、それを自分の必要な人生に従って評価する」、8年生では「今、話題のもの（例えば、環境の専門家、国際的な外交をする人、健康管理）を勉強したら、将来、どのような職業的機会に恵まれるかを仮定してみる」とある。これらは、単に仕事を経験する体験活動を超えて、社会と仕事を結び付け、社会の過去と未来を仕事と結び付け、自分の個性と仕事を結び付けることを目標としているといえるだろう。さらに8年生の、今はまだ明確な仕事とは言えない未確定な領域について考えさせる取り組みは、社会が変化して行く中で、将来を見据える訓練をしているものともいえよう。

一方、米国では、学校常駐のスクールカウンセラーがキャリア教育を担っている。スクールカウンセラーといえ、日本では「不登校対策」というイメージが強い。ところが、米国のスクールカウンセラーは、不登校対応というより、不登校ではない学校に来ているすべての児童生徒に対して「人格・社会性の発達支援」、「学習支援」、「キャリア発達支援」の3つの領域で支援する専門家として活躍している。そして青木(2007)は、この学区に常駐するスクールカウンセラーが担当するキャリア教育の支援目標を具体的に紹介している¹³⁾。

その目標とは、一部を紹介すると、小学校段階で「両親のキャリアについて話す」「仕事の重要性について話せる」等、仕事への態度や人生の役割について気づくような目標、中学校段階では、「将来のプランを立てることの重要性に気づく」「いくつかのキャリアについて、どう準備したらよいか話せる」「将来役に立つかもしれない仕事と現在の仕事を比較する」等、意思決定と社会の関係、学校での学びとの関係、社会の変化に対応してゆくことの重要性に気づくような支援目標である。

前述のように、日本の中学校ではキャリア教育として職場体験が中核に位置づいている。自分の住む地域の中で職場体験は重要な意味を持つと考える。他方で、米国のキャリア教育と比較した場合、やはり、体験活動の重視だけでは、学校での学びとのつながり、社会とのつながり、自分とのつながり、未来の社会とのつながりが希薄なように思える。そして、これらをつなぐ教育を創ることは、決して日本の学習指導要領に反しているものではない。なぜなら、前述のキャリア教育で育成する主要な能力として提案されている「基礎的、汎用的能力」の下位能力である「キャリアプランニング能力」は、次のように定義されているからである¹⁴⁾。

『「キャリアプランニング能力」は、「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な状況を適切に取捨選択、活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力である』

これはまさに、キャリア教育を、教科学習とのつながり、社会生活とのつながり、自分とのつながりでとらえてゆけば達成できるのではなかろうか。しかし日本には、米国のスクールカウンセラーのように、キャリア教育を中心となって設計してゆく教員がいない。以上のことから本稿では、私たちがモデルプランを作って提示することは意味があることだと考えた。そこで私たちは日本で盛んな職場体験を生かして、その活動に関連させて、教科教育や社会、自分をつなぐキャリア教育のモデルプランを作ることを目標とした。

IV 授業実践までの経緯と準備、基本計画

1 授業実践までの経緯

本授業実践は、岡山大学大学院、教育学研究科教育科学専攻科のプロジェクトである課題解決型学習 (Project-Based Learning : PBL) の一環で実施した。

プロジェクトのメンバーは、多様な専門性を持つ仲間で構成した。具体的には、国語、数学、社会、理科、英語、美術の中学校・高校の教職免許を持つメンバー、留学生2人を含め、合計8人である。次に、現在、中学校の教育現場で殆ど実施されている職場体験活動を生かすことにして、その前後3時間の授業プランを作成した。その後プラン実施に協力してくださる中学校を探し、S中学校の協力が得られることになった。S中学校は〇県の地方都市にある公立中学校で、対象となったのは中学2年生3クラスである。

S中学校では、私たちが提示した3時間のプランについて、時間を増やして5時間の時間を取ってくださることになった。この5時間分の具体案については、PBLの院生チーム内、大学教員、実践校の先生方と検討を行なって最終案を作成した。そして最終的に表1、表2に示す5時間の授業を我々で計画し、実践を行った。なお、本稿では、その中の2時間目、3時間目に相当する事後指導Iの活動を中心に報告する。

院生チームの側では、授業実践は大学院生8名のうち6名が行った。1時間目には各教科(国語、数学、社会、理科、英語、美術)のポスターセッションを行うため6名がそれぞれの専門を担当し、2時間目は3クラスで一人ずつ、計3名が授業実践を行った。

この実践の実施に際して、S中学校では、表1のように、生徒のグループ編成と移動教室の際に生徒が混乱のない動線づくりに力を注いでくださった。ポスターセッションの際には、生徒たちが短時間で移動できるように同じフロアに6部屋準備してくださった。表1の「生徒の動き」に示すように、2時間目には同じ職場に行った仲間グループを作り、参加する教科を2教科指定して、教科ごとの人数が偏らないように工夫してくださった。3時間目には多様な職場に行ったクラスの仲間、多様な教科の話を聞いてきたクラスの仲間が、所属学級のクラスに集まるように計画してくださった。こうして、混乱なく、授業を終えることができた。

また、S中学校からの提案で、授業実践の前に生徒たちと面識を持つために、放課後の学習指導に6回通った。これに先立ち、S中学校側では、学年集会で

表 1 実践授業の内容

	目標	生徒の動き
1 時間目 (50分授業) 事前指導	職場体験先でのインタビュー内容を考えることで、生徒たち一人一人が職場体験の目的や意義を見出す。	<p>【指定された教室に移動し、指定された班になり着席する】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 職場体験の目的を持つ。 2. 職場体験先で行うインタビュー内容を個人で考える。 3. 考えたインタビュー内容を班で共有する。 5. 各班で考えたインタビュー内容をクラス全体で共有する。 6. 共有した意見を基にインタビュー内容を個人で再考する。 7. 本時のまとめをし、職場体験での目的を設定する。 
▼ 職場体験 (5日間) ▼		
2 時間目 (50分授業) 事後指導 I	ポスターセッションとマップの作成を通して、各教科で身に付く力と「日常生活」「働くこと」との関係性を見出す。	<p>【指定された教室に移動し、着席する】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 職場体験を振り返る。(5分) 2. 本時の活動であるポスターセッションについての説明を聞く。 <p>【参加するポスターセッションが行われる教科の教室へ移動する(5分)】</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. 1つ目の教科のポスターセッションへ参加する。(15分間) <p>【参加するポスターセッションが行われる教科の教室へ移動する(5分)】</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 2つ目の教科のポスターセッションへ参加する。(15分間) 
3 時間目 (50分授業)		<p>【指定された教室に移動し、指定された班になり着席する】</p> <ol style="list-style-type: none"> 5. 本時のめあてを確認する。 6. 参加したポスターセッションの内容を、各班で共有する。 7. 教科の学びと「日常生活」、「働くこと」の関係性を考えるマップを作成する。 8. マップに記入した各教科で身に付く力と職場体験や日常生活での場面と関連付ける。 9. 各班で作成したマップをクラス全体で発表する。 10. 今日の活動の振り返りをワークシートに記入する。 
4 時間目 (50分授業) 事後指導 II	<ol style="list-style-type: none"> 1. 職場体験で学んだことを振り返り、整理する。 2. 自分の5年後の姿をイメージしたライフプランを構築し、今後の生活に向けての目標を設定する。 	<p>【指定された教室に移動し、指定された班になり着席する】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本時のめあてを確認する。 2. 学校での事前課題(職場体験を通して得た学びの新聞づくり)について、各班で読み、「良いなどおもったところ」を付箋に書き共有する。 3. 作成した新聞をクラス全体で共有する。 4. 作成した新聞を基に、職場体験先への書く手紙の下書きをする。 5. 5~15年後の自分の姿の想像、今何をすればいいのかといった目標を考えるワークシートに記入する。 ①長所や短所、頑張っていること等今の自分を見つめる。 ②未来の自分の理想像を思い描き、実現に向けて今の自分を踏まえた目標を掲げる。 ③5年後はどのような自分になりたいかを考える。 6. ワークシートを活用しながら、5年後の自分への手紙を書く。 7. 本時のまとめをし、アンケートに記入する。 
5 時間目 (50分授業)		

表 2 事後指導 I の指導案

本 時 案 (計画)		
目標	職場体験を振り返りながら,各教科で身につけられる能力と「働くこと」、「日常生活」とのつながりを考えよう。	
学 習 活 動	指 導、支 援 と 留 意 点	
授業前に,ポスターセッションを聞く班をS校教員が振り分けて,生徒を移動させておく。 ポスターセッションの場所:国語…図書館 数学、英語、社会…3つの教室 理科…理科実験教室 美術…美術室		
2 時 間 目	1 職場体験の振り返りをする。(5分) 2 学習目標を設定し,本時の活動を把握する。(5分)	1 職場体験での活動について尋ねることで,職場体験でどのような活動を行ったか想起することができるようにする。 2 本授業の学習目標を提示し,実施するポスターセッションの活動内容について説明することで,本授業の見通しを持つことができるようにする。
	各教科で身につく能力と「働くこと」、「日常生活」とのつながりを考えよう。	
3 時 間 目	3 ポスターセッションに参加し,働くことにおいて教科での学びがどのように活用されているかを知る。 (1回目)15分間 (2回目)15分間 【教室へ移動(5分)】	3 各生徒は6教科中2教科のブースに参加し,それぞれの教科で身につく能力について考え,ワークシート「教科学習と学校生活、社会生活を関連の可視化するマップ」(図)に記入できるようにする。 4 前時で得たマップを作成し,「働くこと」、「日常生活」と教科での学びがどのような意義や関係性があるか気づけるようにする。 ・前時で得た各教科で身につく能力について共有しマップに書かせることで,多様な教科と「働くこと」、「日常生活」とのつながりを可視化できるようにする。 ・学習目標を達成するため,マップを通じて各教科で身につけられる能力と職場とのつながりを自身の言葉で表すことができる。 ・生徒自身の考えを引き出すため,理想の職場のみならず生徒の経験や日常生活とのつながりを意識させる。
	5 マップの記述について,職場体験を通して必要と思った能力に色ペンで線を引く。 (色の指定はなく,能力について視覚的に明確にするため) 6 各班の作成したマップを全体で共有する。(12分) 7 本時のまとめを行い,個人に配布したワークシートに自身の意見を記入する。(8分) 【クラスの教室へ移動(5分)】	5 職場体験での活動を振り返らせることで,自分(たち)に必要なと思った能力に気づくことができるようにする。 ・職場体験でどのような活動をしたのか尋ね,体験を通じて必要だったことについて考えさせる。 6 職場特有の必要な能力ではなく,「働く」上で必要な能力であることについて気づくことができるようにする。 ・6において各班で作成したマップを黒板で共有し,必要だった能力の共通点や相違点について可視化できるようにする。 7 マップ作りを通して,形成した自分のマップを吟味しながら,学習している今を見つめ直し,教科での学びとの関係性や意義を形成できたということを意識させる.生徒自身が「働くこと」、「日常生活」での経験を具体的にイメージしつつ,自分が学んでいることの重要性や切実性を実感させる。

(筆者作成)

院生チームを生徒に紹介,学年便りで保護者に紹介してくださった。こうして,生徒たちに名前と顔を覚えてもらい,授業実践を行うことになった。授業は2019年の11月9日の5,6時間目,2時間続きで総合的な学習の時間に行った。

2 実践授業の開発と基本計画

授業実践構成 2時間のうち,2時間目は,教科横断的な指導を意識した院生チ

ーム主導のポスターセッション、3 時間目には、各教科で身につく力と学校生活、社会生活のつながりの共有を指導計画に取り入れた（表 2）。

2 時間目は、生徒に対して単に情報共有だけではなく、話し合いを行い、互いの価値観の共有を図ることについても指示した。そして、3 時間目には教科学習と学校生活、社会生活を関連の可視化するマップ（図 1）の作成を行った。2 時間を通じて、授業実践目標として、「職業体験を振り返りながら、各教科で身につけられる能力と「働くこと」、「日常生活」とのつながりを考えよう」を設定し、生徒たちの考えを引き出すため、授業実践者の院生やその他の院生、実践校の先生方はファシリテーターとして関わった。

ポスター作成の要点 6 教科（国語、数学、英語、社会、理科、美術）の要点を、①各教科で身につけられる能力について、②学校生活、社会生活のどの場面で活用できるのか、とした（表 3）。その際、各教科で身に付けられる能力は多様に存在するため、専門の大学院生チームで職場体験に密接に関係のある能力を予め一部選出し、ポスターセッションの際に内容または説明として組み込むこととした。

次章にて、美術科を取り上げ、今回の取り組みの様子を詳しく紹介する。また、美術以外の各教科のポスターセッションの目標を次項の表 3 にまとめている。

V 美術を例にした具体的実践の紹介

1 ポスターセッション（2 時間目）目標設定の理由 美術のポスターセッションを実施するにあたり、色や形、素材といった美術の視点から毎日の生活を豊

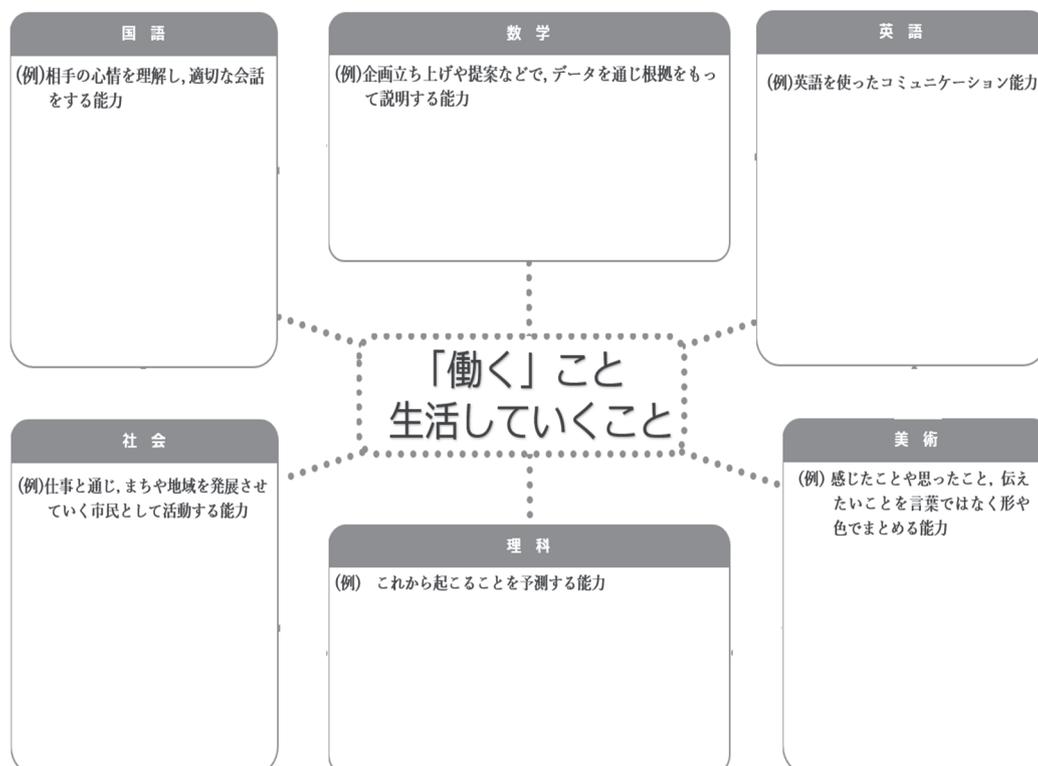


図 1 教科学習と学校生活、社会生活を関連の可視化するマップ

かに彩る美術を日常生活の中で探し、暮らしや社会のつながりを考えることを重視した。また、これらの活動を通して、身の回りにあるもの等に様々な思いや願いが込められているという気づきにつなげ、「自分だけでなく他者についても思いや気持ちを考える能力」等の能力が身につけていることを生徒自身が自覚可能であることをねらいとした。

ポスターの構成 美術での学習と日常生活とのつながりを生徒が持ちやすくするために、教科書に掲載されている「朝起きてから夜眠るまでの美術」(光村図書,「美術 2,3」, pp.5-7.)を基にポスターを作成した。この題材の目的は、「毎日の生活を豊かに彩る美術を探し、暮らしや社会とのつながりを考えて」みることにある。最終ページにある、作成したポスター(図2)には、朝起きてから夜眠るまでの間、行く先々で見つけた美術の写真を載せている。

日常生活の中から美術を探すきっかけとして、教室で生徒が使っている椅子を例として挙げた。椅子の角が丸くなっていること、木が用いられていること等、形や色彩、素材等といった美術の視点から椅子について考えてみることから始める。次に、怪我がしにくくなる、使用者である中学生の体の大きさから椅子の大きさや重さが考えられている等、椅子に込められた思いや考えを感じ取っていく。目には見えない思い等について考えることから、普段何気なく見てきたもの、あたりまえになっていたこと等に対して自分なりの新たな価値を見出すことにつなげる。そして、各自生徒に、日常生活の中から新たに価値を見出した対象物を付箋に描いてポスターに貼っていくことを告げる。最後に、感じ取った思いや考えを共有する時間を設け、見方や感じ方を広げていく。

表3 各教科ポスターセッションにおける目標

教科	ポスターセッションでの目標
国語	はじめに、これまで国語科で学んできた事項をふりかえり、国語科の学びの多様性を再確認する時間を設けた。次に、国語科で学ぶ事項が社会における様々な現代的課題とどのようにつながっているのかを確認し、社会の流れと学校での教科の学びの関係性、学びの意味を理解することに重点を置いた。
数学	数学は日常生活のあらゆる場面で遭遇する。これまでの数学で得た知識を日常生活の場でも活用している。しかしながら、生徒からは「数学って将来何の役に立つの?」という質問が多く、指導において、数学で学習したことを実生活の事例と照合、説明し、具体的に理解できるよう心掛けた。
社会	① 社会科教育を通じて身に付けることができる能力を概観し、その内容と生徒の経験との結びつきをイメージさせる。 ② 教科書を通じ学習する教科内容と「働く」こと、「日常生活」とのつながりを生徒自身で見出す。 ③ 社会科で学ぶ事象が「働く」こと、「日常生活」とどのようにつながっているかを確認する。
理科	① 「理科」と仕事や生活とのつながりを見出す。 ② 実験の手立てや教科書等を例にして、「理科」の学習をする中でどのような能力が身につくかを生徒自身が発見する。
英語	現在社会、グローバル社会の不可欠な共通語として英語が用いられ、授業実践を通じて日常生活の中でもたくさん使っているという気づきから、コミュニケーション能力の大切さへと結びつける。
美術	① 生活に内在する豊かに彩る美術を生徒の日常生活から見出し、暮らしや社会との繋がりに気づく。 ② 社会の中で、様々な価値観を持った人とともによりよい生活を送っていくために、見出した価値を共有することによって、一人ひとりの感じ方には違いがあることに気づき、受け入れようとする。

(各授業実践者の指導案をもとに作成)

授業実践の生徒の様子 教室で座っている机の椅子から美術を探すことから始めたが、普段何気なく使っていたり、あたりまえに使っていたりすることもあり、「椅子」という概念で捉えているようだった。次第に、各家にある椅子と比べてどこが違うのか、そして、なぜその形や色彩、素材なのか考える中で、作り手が込めた思いや願いに気づいていった。各自付箋に書く活動の中では、教室にある消火栓を見て「あれも？」と見つけていこうとする姿がみられた。また、消火栓が赤いのはなぜか、自ら問いを立て、友だちと考えようとする姿もみられた。

2 教室でのまとめ（3時間目）

3時間目にあたる実践授業では、2時間目のポスターセッションで収集した各教科で身につく能力について共有し、教科の学びと「働くこと」、「日常生活」とのつながりについて考える時間である。

2時間目のポスターセッション時では、図1の教科学習と学校生活・社会生活を関連の可視化するマップを用いて、各教科で身に付く能力について考えたことを記入した。しかし、1人の生徒が参加したポスターセッションは2教科であるため、班で共有することによってマップが完成するようになっている。

VI 実践の結果

次に授業の成果について2つの観点で分析した。

1 マップ（図1）について

生徒たちがマップ（図1）に記入した言葉の代表的な例を教科別に表4に示す。美術では「自分だけでなく、他者についても思いや気持ちを考える力」、国語では「人の気持ちを想像する力」、数学では「事実を活用して問題を解決する力」等、生徒たちは各教科の学びの本質を理解し、生徒たちなりに社会生活や働くこととの共通点を見出している様子がうかがえた。

表4 各教科で身につく能力とは（具体例）

教科	内容
国語	・人の気持ちを想像する力 ・相手に分かりやすく伝える力
数学	・事実を活用して問題を解決する力 ・事実に基づいてやり取りする力
社会	・自分なりの見方や考え方を持つ力 ・情報を選択して判断する力
理科	・見通しを持つ力、予想する力
英語	・コミュニケーション能力 ・異文化を理解する力
美術	・自分だけでなく他者についても思いや気持ちを考える力 ・想像する力

2 授業の振り返りについて

マップを作成した2時間目にあたる授業では、短時間ではあったが授業の振り返りを行った。内容は、「大人になった時、教科で身につく能力がどのような場面で必要だと考えますか」「感じたこと、考えたこと、気になったことなどを自由に書いてみよう」との問いで、2、3行で自由な書式で記述させた。この問いの狙いは、生徒が教科学習での学び、職場体験での経験に何らかの意味を見出すことができたのかを確認することである。

この生徒の回答は、回収後S中学校の教員が回収して回覧した後に、86名分

が院生チームに届けられた。この最初の問い「大人になったとき, 教科で身につく能力がどのような場面で必要だと考えますか」について, 院生チームのメンバー4名で KJ法を用いて分類した。その結果, 表5の結果が得られた。

表5 振り返りの内容分析(人)

学び, 能力と場面, 活用	37
活用, 場面	26
学び, 能力	14
関連する回答無し	8

まず, 一番多かったのは, 「学び, 能力と場面, 活用」という3つの側面について触れた回答であった。具体的には, 「理科や社会や数学もいろんな見方をする時大切だと思った」「英語の『コミュニケーション能力』はサービス業などのお客さんと話したりするときに必要だと思った」等である。次に多かったのは, これらの3つの側面には触れていないが, 2つの側面には触れている回答であった。生徒たちの回答の具体例は, 表6に示している。このことから, 今回の授業実践を通して, 教科で学んだことと場面(働くこと, 日常生活)を関連付けて考察することができていたと考える。

自由記述について最も顕著に見られた回答としては, 今後の勉学や将来のために努力をしようとするといった「これからの意欲や願望」に関する回答であった。その他は, 「学びの必要性の認知」, 「関係性やつながり」, 「義務」, 「具体的な将来のイメージ」に関する回答も見られた。

他方で, 生徒の回答には, 問いの言葉の中にある「どのような場面で」に影響されて, 単に場面を限定する言葉や, 場面を示す単語で回答するものもかなりあった。今回分析に用いたのは, 回答形式が自由な授業の振り返りであったので, これが限界ではないかと考える。

表6 KJ方による分類の具体例

項目	内容
「学び」 「能力と場面」 「活用」	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化理解力や人の気持ちを想像する力は, 話し合いの時などに必要だと思う。 ・英語の『コミュニケーション能力』はサービス業などのお客さんと話したりするときに必要だと思った。
「活用」 「場面」	<ul style="list-style-type: none"> ・旅行に行くときに地域の地形や気温や文化を知っていることにも役立つ。 ・外国人の人に話しかけられた時。
「学び・能力」	<ul style="list-style-type: none"> ・国語のコミュニケーション能力が役立つ。 ・学んだ知識を活用して様々な問題を解決する能力。

VII 考察とまとめ, 今後の課題

本稿が目指したのは, キャリア教育を教科教育や社会とつなぐカリキュラムにするため, 現在, 殆どの中学校で実施されている職場体験に接続した授業を創る実践であった。本稿は, 教科学習が社会につながることに気づいてもらう2, 3時間目(事後指導I)について, 主として美術を例に紹介した。

まず, 教科学習では, 近年の教科書では, 各教科の教科書, それぞれの中に, 教科と社会生活とのつながりが記述されている。しかし, それらを教科ごとに取り扱うのではなく, 本稿では, 職場体験活動の事後指導Iとして, ポスターセッション形式を用いて, 6教科同時に同じ時間で実施した。

特に, 職場体験活動と直結して教科の学びをそれぞれ専門的な視点, 生活と

関連した視点で生徒に提示できたことは意味があったと考える。中学校の生徒たちにとっても、様々な専門性の視点から職場体験の経験を捉え、生活とのつながりを考え、学びを意味づけることができたことから、職場体験の意義も深まったと考える。

また、この実践は、実践者の院生チームにとっても意義のある活動ができた。今回は大学院でのグループによる課題解決型授業の位置づけで、専門性を超えたチームを形成して取り組んだ。各メンバーが、キャリア教育についての理解を深めただけでなく、それぞれのメンバーのもつ教科の専門性を活かして、複数教科での授業実践を行うプロセスで互いに何度も議論を重ねたこと、それぞれが各教科での専門性を活かしながら互いに協力し合ったことで学識の広がりを実感できた。

実践の成果については、表6に見られるように、生徒が教科学習で学んだ内容と学校生活、社会生活を関連付けていることが読み取れ、生徒なりに意味を見出していることがうかがえた。加えて、自由記述では今後の勉学や将来のために努力しようとする姿勢が見られた。これらの結果は、生徒が職場体験での社会経験、日常生活、教科の学びについて、さらには自分とのつながりについて、何らかの意味あるつながりを見つけることができたことと捉えられるのではないだろうか。

このように、生徒が学びについて、自分なりに意味づけていくことは「教育のレリバンス (relevance)」という概念と類似していると考察できる。「レリバンス (relevance)」は、名詞の訳語として「関連 (性)、適切、適当」と訳され、この「教育のレリバンス」という概念は、アメリカを代表する心理学者の1人、ジェローム・ブルナー (Bruner, J. S.) によって提案されたものである。教育の適切性を表す概念が「レリバンス」であり、事実、真実なもの、興奮、感動を呼び起こすもの、意義、意味のあるものといった実存的なクライテリオンによる自己報酬的系統の考え方を「個人的レリバンス (personal relevance)」、学習内容が、世界が直面する悲痛な諸問題やその解決の如何が人類の存亡にかかわるような問題に対し何らかの関係性を持つという考え方を「社会的レリバンス (social relevance)」と定義している¹⁵⁾。今後はこの「教育のレリバンス」の概念を「職場体験」を通じたキャリア教育に用いて、学んだ内容と経験を生徒自身がどのように意味づけているのか、さらに量的、質的の双方のアプローチから明らかにしていきたいと考える。

最後に、少数ではあるが、生徒の自由記述の中に、実践した授業や教科での学びにおいて「違和感」を主張する回答があった。学校での学習を通して獲得する力や習得する学びの必要性を疑っている内容であった。将来を見据えたキャリア教育を実践する際には、教科学習を通じて学んだことが本当に活かされていることを、生徒に対してもう少し丁寧に示すことも今後の課題と考える。

<謝辞>

本研究は、岡山大学教育学研究科 (修士課程 教育科学専攻) のコースワーク

(Project-Based Learning: PBL)の一環で行われた取り組みをまとめた研究である。同じチームとして実践に協力してくれた林田圭, 伊藤圭祐, 林大智, 武内シヨーン, 韓笑, 趙徳慧諸氏に感謝致します。また, 実践に際しましては, S 中学校の生徒の皆さん, 先生方に暖かく迎えて頂き, 多大なご協力を頂きました。特に, 大学院生の取り組みに, 5 コマもの時間をとってくださり, 加えて細かなご指導を頂きました。また, 岡山大学教育学研究科の早川倫子先生, 又吉里美先生, 三宅幹子先生には, 数度にわたりご助言頂きました。その他にも, 多くの方のご助言, ご助力をえて, 本実践に取り組むことができました。ここに記して皆様にお礼申し上げます。

[注]

- 1) 野村総合研究所, 2016, 「日本の労働人口の 49%が人工知能やロボット等で代替可能に」 <https://pc.watch.impress.co.jp/docs/news/738555.html> (2020 8/28)
- 2) 中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育の接続改善について」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201c.htm (2020 8/28)
- 3) 中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」, p. 16.
- 4) 新井邦二郎 『進路指導 (教職シリーズ)』, 2012, 培風館, p. 132.
- 5) 国立教育政策研究所, 2017, 「平成 29 年度における職場体験, インターンシップ実施状況等について」, p. 1.
- 6) 国立教育政策研究所, 2020, 「キャリア教育に関する総合的研究 第一次報告書」 p. 20.
- 7) 中央教育審議会, 2011, 「今後の学校におけるキャリア教育, 職業教育の在り方について」 p. 20.
- 8) 国立教育政策研究所, 2020, 「キャリア教育に関する総合的研究 第一次報告書」, pp. 21-22.
- 9) 文部科学省, 2018, 「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 総合的な学習の時間編」, p. 6.
- 10) 田中真秀, 2019, 「教科横断的カリキュラムの意義と課題—平成 29 年告示版学習指導要領の視点を軸として—」川崎医療福祉学会誌 Vol. 28 No. 2. p. 341.
- 11) 青木多寿子, 2012, 「米国の中学校の必修科目『ウェルネスとキャリア』の視察; ガイダンスの目標, 社会科の目標との関係を中心に」, 学習開発研究 5, p. 35.
- 12) 同上, pp. 41-43.
- 13) 青木多寿子, 2007, 「『ベスト実践集 (1997)』に見るカンザス州 (米国) のカウンセリング プログラムの開発」, 学習開発研究 1, pp. 73-82.
- 14) 中央教育審議会, 2011, 「今後の学校におけるキャリア教育, 職業教育の在り方について」, p. 26.
- 15) Bruner, J. S. , 1971, "The Relevance of Education", WW Norton & Co. J. S ブルーナー, (訳) 平光昭久, 1972, 『教育の適切性』, 明治図書, p. 204.

[美術ポスター作成における引用]

- ・春日明夫, 長田謙一, 大橋功, 小泉薫, 小澤基弘, 泉谷淑夫 (代表著者), 2013, 『美術 1 美術との出会い』, 日本文教出版, p. 39.

- ・春日明夫, 長田謙一, 大橋功, 小泉薫, 小澤基弘, 泉谷淑夫 (代表著作者), 2013, 『美術 2・3 下 社会に広がる美術』, 日本文教出版, p. 23.
- ・同上, p. 29.
- ・春日明夫, 泉谷淑夫, 大橋功, 小澤基弘, 新関伸也, 村上尚徳 (代表著作者), 2015, 『美術 1 出会いと広がり』, 日本文教出版, p. 35.
- ・同上, p. 45.
- ・春日明夫, 泉谷淑夫, 大橋功, 小澤基弘, 新関伸也, 村上尚徳 (代表著作者), 2015, 『美術 2・3 下 美の探究』, 日本文教出版, p. 32.
- ・同上, p. 37.
- ・酒井忠康 (代表著作者), 2018, 『美術 1』, 光村図書, p. 34.
- ・同上, p. 36.
- ・同上, p. 41.
- ・同上, p. 66.
- ・酒井忠康 (代表著作者), 2018, 『美術 2・3』, 光村図書, pp. 5-7.
- ・同上, p. 34.
- ・同上, p. 39.
- ・同上, p. 54.
- ・同上, pp. 56-57.
- ・同上, p. 64.

Development of Cross-Curricular Career Education Making Use of Internship in a Middle School : Building Relevance of Students 'Subjective Learning, School life, and Social Life

AOKI Tazuko*1, SUGITA Shintaro*2, YAMASAKI Mayu*2

As part of career education, work experience activities are conducted in almost all junior high schools in Japan. This paper introduces a practice that helps students build meaningful connections between subjects learned in school, school life, and social life through guidance provided both before and after work experience activities. Specifically, in the first hour of post-activity instruction for the work experience of second-year students, six graduate students with teaching licenses made use of their respective specialties, combining work with subject specialties and students' lives through poster sessions. In the second hour, graduate student teachers showed them worksheet which made them visualize the connection between work, life, and subjects. After working with the worksheet according to their internship work, students discussed their case each other. The results of these activities were confirmed by classifying the lessons reviews written by students. Several descriptions contained the connection that the lesson practitioner had aimed for. The most common answers by the participants included their hope they would make study more for their further and for their satisfied life.

Keywords: Career Education, Internship, Cross-Curricular, Relevance.

*1 Graduate School of Education, Okayama University

*2 Division of School Education and Psychology, Graduate School of Education, Okayama University

